

(^_^)v 趣味に生きる(第48回) ~☀~☂~☘~☺~☀~☂

探 検 隊 ～社会科見学編～

矢 澤 直 行
(株式会社保健科学研究所)

◆はじめに

世間には面白いものがたくさんある。何を面白いと思うかは人それぞれ違う。ただ、世間にはこんなに面白いものがあるのに私一人だけで楽しんでいては申し訳ない。ぜひ多くの人にもこの楽しさを知ってもらいたいと思ったりする。他人に自分の趣味を押し付ける気持ちはないが、こんなに面白いことを知らないでいる人に教えてあげたいと思うのは、やはりこの上ないおせっかいかもしれない。興味のないことを押し付けられては迷惑千万である。しかし、そのなかに興味のある内容が含まれていれば少くくらは話を聞いてもいいと思うし、さらに興味を持てばその活動に参加しようと思うかもしれない。今回は私の企画に付き合ってくれた人たちと一緒にあちこち行ったお話します。

◆街歩き探検隊

都市をふらつきながら気になるものを見つけるのは楽しい。その探索は気ままな単独行動が基本だ。おおまかな目標を設定しながらも足の向くまま気の向くままぶらついて面白いものを見つけるのはまさに都会の探検である。目標はおもに路上観察と建築探訪である。これまで今和次郎の「考現学入門」、赤瀬川原平の「路上観察学入門・超芸術トマソン」、藤森照信の「建築探偵」などに影響を受けながらいろいろついてきた。かれこれ 35 年以上になるだろう。

近頃はテレビでタモリがぶらついたり、さまあ～ずがうろついたりする番組の人気の高いのも、街歩きの面白さに人々が気づいた証拠だろう。そんな感じの私の活動にやがて物好きが集まりこれを探検隊と銘打って気まぐれにぶらつくようになっていった。

私はたとえ少人数のツアーでも必ず下見をする。行き当たりばつりの偶然性も魅力はあるが、限られた時間内に面白ポイントを盛り込むには綿密な計画が必要だ。特にある程度の人数が集まったときは食事や休憩場所は重要となる。どこにどのような食べ物屋や喫茶店があるかあらかじめ調べておき、参加メンバーの好みによって店を選択出来るようにしている。したがって、目的地の探索、はじめは面白そうな場所の



写真1 旧朝倉家住宅、代官山

探検、仲間を連れて歩くための下調べをする。それから皆を連れての団体行動となり、同じ場所を少なくとも2~3回は巡ることになる。かと言って、私にとって決して退屈なものにはならない。不思議なことに、その場に行く目的によって毎回違った発見をするからである。したがって、単独の自由気ままな行動と団体行動とは、同じ場所に向かっても見えてくるものが違ってきて自分にとってはさらなる発見があるのだ。

少人数の街歩きであれば、目的地に近い駅に集合して、ぶらぶら歩きまわって解散となるが、それも4名までである。なぜ4名か？それは一般的にテーブルを囲む人数である。食事にしても喫茶店で休憩するにしても、4名を超えると急に自由が利かなくなる。それでも2テーブル、8名までならまだ何とか可能である。JRや東武鉄道は8人から乗車料金の団体割引が適応されているが、これも座席単位での人数からきている。

しかしこれが10人を超えてくると途端に面倒なことになる。その場合にはグループを半分に分けて、食事組と見学組にしなければならない。片方のグループが食事をしている間に、もう一方のグループは1時間程度の見学ルートを回ってもらい、帰ってきたら交代する形を取らざるを得なくなる。これとて16人までが限界である。それ以上の人数が集まったら団体であることをとことん意識して行動しなければならない。美術館や博物館などは20名から団体割引が適応される。多くの私鉄は25名以上となっている。近頃はシニアの団体さんが元気に活動されているが、見えないところで世話役さんが一生懸命活躍されている。しかし、私は統率を取らずに勝手気ままな団体行動が理想的だと思っている。これが結構難しい。

団体行動は一人歩きとは全く異なる面白味がある。同じものを見て人もそれぞれに感じ方が違う。ものの見え方が異なるからだ。この見え方のずれが多様化することで対象が放つ輝きがよりきらびやかに映るのだ、と分析してみたところそんな側面を実感するよりも実際には大



写真2 江戸東京たてもの園

勢でワイワイやっているのが楽しいのだ。とはいうものの、これまでの活動内容による団体行動には限界を感じていた。そんな折、職場の昭和大学は福利厚生と職員同士の交流を高めるために、同好会設立を奨励し、承認されたグループにはそれぞれ年間10万円の活動資金援助を決定した。目標100グループの設立を奨励するという総額一千万円の太っ腹予算だ。同好会の承認条件は最低構成人員が10名、参加希望者は拒否しないこと。家族や友人など職員以外でもオープンにメンバーとして受け入れること。毎月定期的に活動すること。グループの構成メンバー表と年間活動計画書を提出し、審査を受けて承認される。年度末には活動報告書と会計報告書の提出が義務付けられている。

集団の活動の企画づくりに悩んでいたが、発想を転換し集団を受け入れてくれる仕組みへと目を向けてみた。小学生のころ社会科見学で出かけた企業の工場見学がある。命名「社会科見学同好会」。我々はこれまでの街歩き仲間をコアメンバーとして同好会をスタートする。今後みんなが参加したくなるような企画を立てることによってメンバーはどんどんと増えるはずである。

以下に紹介するのは、ここ数年の「社会科見学同好会」の活動の一部である。

◆陸・海・空ツアー

活動計画を練るためには企画会議が大事である。そう言いながら会議と称して集まると結局

は飲み会になってしまうのだが、そこは若干抑えつつ改めて社会科見学同好会としてどこへ行って何をするか考えてみた。関心の多様性、要求の多様性を再認識する。

基本的に我々の行動はその辺をうろつくことである。ただし、前述したようにある程度の人数が集まった場合は、大勢で街中をうろつくのはあまり好ましくない。やはり社会科見学の定番として工場見学が相応しい。調べてみると工場見学を実施している企業は多いが、稼働中の工場を見せるために週末は実施していないところが多い。我々サラリーマンはやはり日曜日の活動に限定されてしまうため、日曜日に受け入れている企業を探そうとすると途端に選択肢が絞られてしまう。しかも、それぞれが小学校時代に一度は訪れたことがある社会科見学の対象となった食品工場などへふたたび訪れるのも面白みに欠ける。そうなると対象はビール・ワインなどのアルコール飲料製造工場が浮上してくる。「ただで飲ませてもらえるらしい。」という情報に人々は敏感に反応する。

1. 陸の巻

記念すべき第1回の社会科見学はビール工場と競馬場で実現した。

目的地である東京都府中市にある「サントリー武蔵野ビール工場」へは、京王線・JR南武線の分倍河原(ぶばいがわら)駅からビール工場まで無料のシャトルバスがある。参加希望者は駅前のシャトルバス乗り場に集合。小学生じゃあるまいし点呼など取らない。集合時間に集まった人だけで行動を開始することを鉄則としている。遅れたら勝手に追いつくか、参加をあきらめるか自分で決めればよい。今回は希望者23名全員が集まった。

ガイドツアーは工場見学とビール試飲で70分。今回は子供連れもいる。事前にネットで調べ、電話でも詳細を問合せしている。受付を済ませたらいよいよ工場見学の開始だ。ここに工場が出来たのはビールにふさわしい豊かで清浄な水があるからといった説明から始まり、一押し

のプレミアム・モルツで用いられているアロマホップと通常のホップの香りの違いを嗅ぎ分けつつ、休日でも稼働している生産ラインとビールの醸造タンクを見て、いよいよ試飲の時間となる。

ビールは3杯までいただけるということで、まずあつという間においしく一杯。ふたたびビールサーバーカウンターに行列して2杯目をいただく。するとカウンター前で解説のお姉さんが商品説明を始める。「ビールをおいしくいただくには、いくつかのポイントがあります。」、既においしくいただいています、話はまだ終わりませんか。3杯目をいただきに行こうと思えますが…話が長い。「…それではそろそろお時間となりました。」。レレレ、もう一杯飲みたいところで我慢する。これぞビールを継続的においしくいただく極意かッ！



写真3 ビールをおいしく飲む秘訣



写真3 サントリー武蔵野ビール工場で記念撮影



写真4 東京競馬場

まだ飲み足りない気分のまま工場を出ると「東京競馬場」は目の前である。折しも快晴に恵まれ良馬場、初めて競馬場に来た人も多く、試みに馬券を買ってビール片手にレース観戦だ。戦績は完敗なれど雰囲気を中心に味わって流れ解散。居残り組は次のビール、次のレースへ。ビール工場で学んだ極意と同じ、さらにもうひとレースと深入りしないところで留めるのが賢明だ。

第1回の活動は好評を博し、次の提案がなされた。その後さまざまに展開するのだが、まずは呑み助だけが集まってビール工場見学の流れを踏襲する。「エビスビール記念館」はおしゃれな恵比寿ガーデンプレイスにある。山手線恵比寿駅から長い動く歩道でガーデンプレイスに到着する。今回は有料(500円)のツアーである。記念館はさながら豪華なステージを思わせる。エビスビールの歴史コーナーを抜けると、先ほど目にしたコミュニケーションステージに上げられてビールのテイastingとなる。他の見学者の視線を浴びながらステージでビールを飲む演出に、他では味わえない気分とビールの味わいである。ツアーの40分は短い。今回もビールを2杯だけいただくと足は自然と次に向かうことになる。この会場はうまい作りになっており、ステージを降りると引き続き有料のテイastingサロンとお土産売り場になっている。素通りは出来ない仕組みである。このツアーはオプションとして隣接の「東京都写真美術館」



写真5 エビスビール記念館のテイastingステージ



写真6 ステージで試飲

の組み合わせがよろしいでしょう。

今度はワインが飲みたいという声上がる。地方の名物を食いたいという。観光もしたいという。あれもしたいこれもしたいと言う。言うのは簡単である。それなら今度は「ワイナリー」見学だ。

山梨のワイナリーに行く。名物「ほうとう」の手作り体験が出来る。昇仙峡にも行く。そんなツアーなら大勢が行きたいと言い出した。何人になるかよくわからないが観光バス1台にとどめたい。ルートを作る時間配分を考える。観光バスを手配して訪問先にも予測人数で予約を取る。参加費の見積もりを出す、直前まで参加者が確定しない。観光業者がやることをひとりでする。ツアーの手作り感が面白いものの極めて面倒である。



写真7 ほうとう手作り体験



写真8 ワイナリーバスツアー

ツアーは予定通り無事終了したが、もっといろいろ出来たのではないかと、他に寄ることも出来たのではないかなど反省しきりである。

試みに、既成のはとバスが企画する「いばらき社会科見学ツアー」に参加した。浜松町に集合だが、出発直前に今日は参加出来ないだの、電車の乗継を間違えたなどと連絡が来る。出発10分前だがキャンセルして返金の手続きをする。まったく自由でのんきな会員ばかりである。結構結構。さて、なんとか時間通り出発すると「おかめ納豆」のタカノフーズ、磯崎漁協の「一口アワビ養殖施設」見学と試食、「那珂湊おさかな市場」で豪華な海鮮丼の昼食、「かねふくめんたいパーク、あみプレミアムアウトレット」で買い物と軽食、大満足の内に帰途につく。今後の企画として参考になるが、ここまで盛りだくさんの内容は素人企画では真似出来ない、さすがはプロの手腕だ。今回の問題は我々以外に、一般のお客さんも同乗していたことである。どこへ行ってもにぎやかな連中に他のお客さんは



写真9 いばらき社会科見学ツアー

さぞ迷惑だったことでしょう。このツアーの後の感想は、やはりツアーは旅行社のパッケージに限るといふ会員の意見となった。

2. 海の巻

海上から工場夜景を眺めたい。テレビの紹介番組を見て興味を持った会員が多く、実は本同好会の幻の第1回目の企画であった。しかし、この工場夜景見学は、遠方を通過する気まぐれ台風のおかげで波の高い日が続き出航の決断が前日まで持ち越され、結局中止となった因縁の企画である。今度こそはと台風の発生が少ない時期を狙い、半年以上前から計画を練ってきたものでぜひとも成功させたい。当初はツアー会社の企画に参加する計画であったが、希望者が増えてきたので、いっそのこと船をチャーターすることにした。

京浜フェリーでは15人以上集まれば、定員82名の「ゆめはま」を貸し切りに出来、川崎のコンビナートの運河に連れて行ってくれる。しかも一般のツアーよりも船の速度が比較的ゆっくりであり、かつ他の客の迷惑にもならない。我々にとってはうってつけの条件である。しかも料金は一人ずつの定額設定だから、たくさん人を集めて頭割りであく上げようとする気遣いもいらない。

夕刻、横浜港ピア象の鼻(棧橋)に集合。参加者は三々五々飲み物や食べ物を抱えてやってき



写真10 乗船開始

た。ごみを持ち帰ることにすれば船内への持ち込みは自由である。まだ日没前で明るい霧雨が気になる。いよいよ乗船、なんとキャビンは少し薄暗い照明と飾り付け、4コーナーに分かれたシート席がまるで昭和時代のスナックの雰囲気だ。こんな想像もしないサプライズがうれしい。90分のツアーに出発だ。

この日は七夕だった。誰かが七夕ライトダウンの呼びかけで工場の照明はどうなっているのだろうと言い出す。なんとということだ、そんなことは全く考えていなかった。照明のないコンビナートなどさびしすぎる。船長に尋ねると、通常より暗いかもしれないなどと不安なことを言うが、船長も分からないのだ。とにかく行ってみよう。コンビナートに近づくまで宴会だ。

倉庫群から徐々にコンビナートに近づいて行く。雨が降り出した。コンビナートの灯りが見える。いつもより灯りを落としているにしても十分に見えそうだ。船は岸に沿って進み始めた。キャビンからは視界が悪いので上階のオープンデッキに狭くて急な階段を上る。雨足が強くなってきた。実に天候に恵まれない企画だとぼやきつつ、近づく工場の灯りに心躍らせる。

煙突から炎が吹き上がっている。しかもゴーツと音を立てながら炎上している。フレアスタックと呼ぶ石油精製過程で発生するメタンなどの有毒ガスを燃焼させる仕組みだ。揺れる船上で雨風に耐えながら切れ切れに聞こえる轟音を聞き、コンビナートのにおいをかぐ。現場に赴くことはメディア報道では伝わらない貴重な体験が出来るところに価値がある。



写真11 フレアスタックの炎



写真12 雨に霞むコンビナート

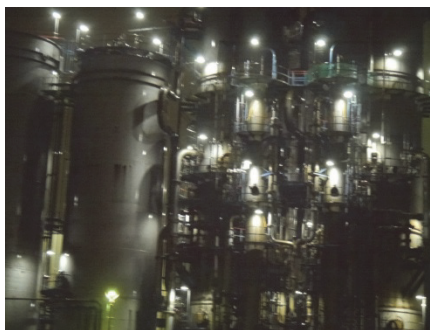


写真13 近づくると迫力がある

船はさらに運河沿いを進み、我々は照明に浮かび上がったパイプラインに魅了される。ふたたびベイブリッジをくぐりすっかり日の落ちた横浜はみなとみらいのイルミネーションに目を奪われながら帰路に着く。そのころにはすっかり雨が上がっていた。自然の素晴らしい演出も手伝って大満足のツアーは、もう一度催行することを約束してお開きとなった。



写真14 みなとみらいの夜景



写真15 無事帰港

待望の第2回工場夜景クルーズは翌年リピーターの熱い要望と、評判を聞きつけた人たちが構成されたメンバーである。ツアー参加2回目の人たちは同じルートをたどりながら今回はフレスタックの炎が小さいとか照明が足りないなどと、いっばしの工場夜景評論家になっている。潮風が心地よい、デッキでのビールがうまい。降っても晴れても楽しい貸し切クルーズである。夏の間は何回でも開催したい企画だ。急患のため参加出来なくなったドクターたちのためにもまた次の開催が約束される。

3. 空の巻

機体整備工場を見学したい。昔からその存在は知っていた。一度は行ってみたいと思っていた。その思いは皆同じであった。したがって、今度は「羽田の整備工場」へ行くらしいというわさを聞きつけた人たちが参加したいと言ってくる。20~30人の予想をはるかに超え、50

人を飛び越えて100人を超えそうな勢いである。とりあえずJALに問い合わせしてみる。「100人ぐらいで見学コースの参加をお願いしたいのですが、整備工場は広いから大丈夫ですよ。」勝手な決めつけである。「はあ、申し訳ございませんが100人はちょっと一度にはお受け出来ません。」と言われ、2チーム別々の日程で仮予約を取った。しかしこれは参加者にとっても参加日の選択肢が増え、より好都合になった。

見学コースは年末年始を除き毎日午前2回、午後2回開催されている。航空教室30分、コスプレ・展示エリア30分、工場見学40分で合計100分の構成である。いずれも人気が高く、特に我々のような団体の申し込みには枠は数ヵ月先まで結構埋まっている。4ヵ月先と5ヵ月先の日曜日の其々最終時間帯のコースを仮予約出来た。正式な予約には参加者全員の住所・氏名・年齢・性別を記載した名簿の提出が求められる。

アクセスは浜松町からモノレールに乗り「新整備場駅」で下車する。この駅は一般客があまり乗降しないので快速は止まらない。しかも別の「整備場駅」も存在してまぎらわしい。こうなるとのんきなわが会員たちは、快速に乗って先まで行ってしまったり、手前の「整備場駅」で下車する人が必ず出てくるのが予想されたが、はたしてその通りであった。JALメンテナンスセンター1の守衛室で代表者の私が身分証明書およびメンバー表を提示し建物に入る。ビール工場と比較するとかなりセキュリティが厳しい。

見学コースの始めに航空教室で飛行機がなぜ空を飛べるかといった解説をしてくれる。団体の場合はそれに加え別途テーマを指定することも出来る。医療に携わる我々がお手本にしている航空業界の安全管理について関連して話をして頂けるようにリクエストをしておいた。しかし、飛行機の話が面白くて安全管理の話まで到達出来ず時間切れ。

教室の後ろにはパイロットやキャビンアテンダントなどのなりきりコスプレ衣装が各種取り揃えられ、コックピットやジェット機をバック



写真16 なりきりコスプレ



写真18 整備作業中



写真17 気分はファーストクラス

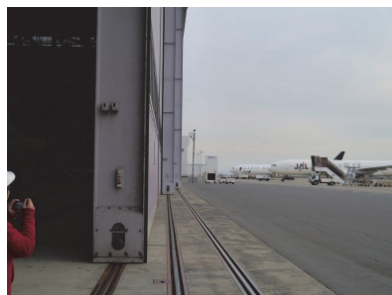


写真19 格納庫のエプロンの先は滑走路

に記念撮影が出来る。教室を出ればそこは JAL に関するさまざまな展示がある。そこで、いまだ掛けるチャンスのないファーストクラスのシートにしみじみ腰を下ろしてみた。

集合がかかると今度はヘルメットをかぶりいよいよお待ちかねの機体整備工場の見学だ。セキュリティのかかったドアを2つ抜けて格納庫に出ると、3つの機体がつつましく収まっているように見える巨大空間にでた。数人の作業中の整備士が小さく見えている。この展望デッキからは機体の上部から全体が眺められる。ジェット機はおよそ300万点以上の部品から成り立っていてこの整備工場には30万種の部品が取り揃えられているという。これらの部品は機種が異なってもなるべく共通で使用するよう工夫されているという。整備工具も収納位置が決まっており、未収の工具の確認が適格に出来るような仕組みが出来ている。

階段を降りていくと巨大な機体にさらに近づく。足元には整備器具に使う電源や水を供給しているケーブル。いつものように自由気ままな



写真20 JAL見学ツアー

我々は作業中の機体に近寄りすぎておしかりを受ける。

機体をバックに記念写真を撮る。滑走路に面した巨大な機体の出入り口からの広大な眺めは他では味わえない。そこからエプロンと言われるところへ出て行こうとする我々は、またもやおしかりを受ける。ここは航空法空港管理規則で規定されている制限区域で、許可がなければむやみに立ち入れない場所であった。

小学生の子供を連れた家族も複数参加した。

2 回合計の参加者 93 名、皆大満足のツアーとなった。

JAL の次はお隣の ANA を見たくなる。ただし、ANA は週末、祝日の見学は行っていない。それでも熱烈的なファンは有給休暇をとりあるいは当直明けにもかかわらず 8 名が参集した。駅は JAL と同じ「新整備場駅」で、降りてしばらく歩くと ANA コンポーネントメンテナンスビルに到着する。今回は少人数で一般参加のため、中学生の集団とともに航空機と整備の話聞き、ビデオを見た後、やはりヘルメットをかぶって整備工場の見学となる。平日の午前中ということもありエンジン部分を開けて整備している所を間近に見ることが出来た。

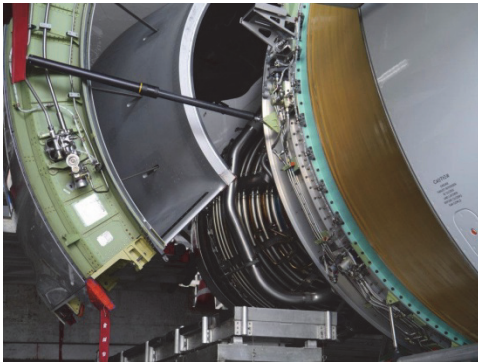


写真21 ANA エンジン整備



写真22 ANA 見学ツアー

JAL も ANA も同じような整備工場でありながらもことなく違う雰囲気が漂うのも両方を見学したからこそ感じ取れる。仲間大勢で見学すると、少人数グループで参加する違いも楽しめた。

◆ 次の企画を練りつつ

20 年も前、エジプトに駐在していたころの話だが、「家族でオアシスめぐりをしようと思って」と友人と話していると「私も行きたい」、「私も、私も」と人数が増えて、結局観光バスを手配して出かけたことがある。世界中どこへ行っても同じことをやっている。どうも私はそういった役回りのようだ。



写真23 シーワオアシス、エジプト

これまで会員登録して企画に参加してくれたメンバーは 162 名となった。実はこの社会科見学同好会は私の退職に伴い大学の公式同好会としては既に解散している。それでも、仲間が集まってバスツアー企画に参加するなどの活動は継続している。街歩き探検隊の団体活動のバリエーションが出来上がったと理解すればよいだろう。

仲間への連絡は昔からいつもロコミでしかない。「今度、どこそこへ行くらしいよ。」の噂話を聞きつけてなんとなく集まって来る人たちと出かける。ひま人の私はひま人と一緒に、こんなゆるいオープンな感じの(実は綿密に計画された)企画を今後も続けることになるでしょう。